

回想録

愛媛県 岡本徹恵

昭和の時代は終わった。いまさら戦争のことをという人もいるでしょう。

忘れようと思うけれども、年を取るに従って青春時代の記憶がよみがえる。当時は血沸き肉踊る時代、光陰矢の如しともうしますが、月日の立つのは早いもので戦後すでに四十余年、戦場の思い出は遠ざかり、脳裏から消え去ろうとしております。しかし、その反面、遠い昔の戦場を偲ぶ思いが増して参ります。

思えば四年有余の中国戦線。

昭和十七年四月十五日、第一補充兵として第一四四連隊（高知）に応召、第一機関銃中隊で教育を受け、七月十九日第二三六連隊要員として坂出港を出発、大陸に渡り、第三機関銃中隊に編入、湖北省蒲圻県羊楼洞着。十月一日まで同地区の警備とともに、再度実戦教育を受け

る。

内地に帰る見込みはないと思い、十八年五月十日、支那派遣軍南京下士官候補隊教育学校に入隊、十月十日同隊卒業、原隊復帰、第二機関銃中隊に編入され、湖北省監湖県長安鎮つき、清水源作戦に参加。

十一月十一日より十二月二十四日、常德殲滅作戦に参加、湖北省監利県監利付近の警備。

三月十八日に行李彈薬班中隊に編入され、この中隊にはいる。

四月二十九日より八月八日、第一期湘桂作戦。

八月より十二月二十三日、第二期湘桂作戦。南部粵漢打通作戦

三月十七日、広東西南地区並びに三南作戦。

七月六日、南昌に向かう機動作戦に参加、蕪湖に到着。

二十一年五月十九日、停戦により山口県仙崎港に帰港。現役除隊。

二十一年五月二十一日、懐かしきわが家に足をいれる。

中国戦線にあって、最もなつかしいのは、やはり行李

彈藥班中隊で、なかでも警戒小隊の皆さんであります。

昭和十九年四月二十六日の夕方、小柴部隊は一年近く警備した長安の町をあとにした。湖南省北部の長安は、連日の雨で、この地方特有の赤土道路は黄色のぬかるみだ。その悪路を小柴部隊の諸隊が間断なく進む。渡辺少尉が兵舎の広場に整列した隊員に行動間の訓示を伝達。

やがて長安の夕暮れがせまるころ行李彈藥班中隊も連隊本部直轄諸隊に続行して前進を開始し、分隊は尖兵で前進した。洞庭湖周辺は四月にはいるとちょうど日本の梅雨のような雨期にはいり、朝からの曇り空やがて雨となった。長安から雲漢に通ずる軍公路を部隊はただもくもくと進む。夜半ころより雨はげしく降り、雷も加わり、雷鳴電光のもと行軍は難行した。

夜が明けて雲漢に近い粵漢鉄道の線路に進出、みあわず兵の顔も軍衣も全身泥まみれ、まるで泥人形のような姿で、昨夜の難行軍を物語っていた。部隊は城陵磯で揚子江を渡河して、さらに行軍をつづけ、五月三日払曉、集結地・調弦口李家台に到着した。

先発の岡本晴助小隊長の待つ宿舎にやっとなつた。

師団は、この焦山河周辺に集結して約一か月間、次期作戦の準備をしたのである。

その間、警戒小隊においても連日戦闘演習を実施し、そのあい間に各輸送の警護に従事したのであるが、警戒小隊では李家台到着早々火災を起こし、各隊の応援をえて夜どおしの消火作業をした。

五月も下旬になって、いよいよ集結地を出発することとなり、五月二十六日、私の分隊は馬返納のため部隊主力より一日早く李家台を出発。その日の夕方、師団輜重隊のある万瘦に到着、本吉部隊本部に返納し、最後の集結地・石首南側地区に向かう。

この日の行軍は敵状も静かで鼻歌まじりのノンキなものである。途中昼食の大休止には軍公路がわの民家にはいり、鶏、野菜等の収穫もあり、ゆっくりした食事である。

食事後また前進、石首―岳州の線から一斉に進撃を開始した。一大進攻作戦である。夜になる、暗闇の山路を行軍中隊は秋田隊に続行、分隊は後尾警戒である。突然、前方で銃声が二、三発、小隊の主力は尖兵で進んでいる。

各小隊は行軍中止、どこから撃っているのだろうと左右を確認。また弾丸が飛んでくるが敵の姿は見えない。

左側の山のなかごころに光が。兵が「あそこだ」。我らも撃ってみたものの闇夜に鉄砲である。銃声は止み、もとの静けさにもどった。嚴重警戒配置をとり、休止していると、まもなく伝令により駄馬小隊長・坂本正治曹長戦死のことを知る。

その夜の宿舎、塩井で分隊長より小隊長となり、警戒小隊を離れる。心情を思うとはげしい感動がこみあげてくる。まさに断腸の思いであった。

なお、捨石とられた多くの戦友のことを忘れてはならない。謹んでご冥福を祈るのみであります。

(一部、戦友・本多優氏の日記によるものであります)